□には、リンクがあります。※は、WAMNETの事業者情報にリンクします。

事業所名　グループホーム　神楽の里　※

日付　平成19年2月2日
特定非営利活動法人
評価機関名　ライフサポート

評価調査員　在宅介護経験15年
評価調査員　在宅介護経験12年

自主評価結果を見る　（まだリンク先はありません）

評価項目の内容を見る

事業者のコメントを見る（改善状況のコメントがあります！）※

外部評価の結果

講評

全体を通して（特に良いと思われる点など）

ある特養の短期入所を利用していた人が最近入所してきた。特養から、その人の情報提供の中で、『夜ゆっくり寝ていただきたいので、リハビリパンツを使用しています』と書かれていた。このグループホームでは、早速、夜に声かけしトイレ誘導した結果、殆んどトイレで排泄でき、布パンツで普通に生活出来るようになった。「たまには間に合わなくて放尿しますが、それは誰でも一緒だから」と管理者は言う。人間の一番大きな自立は、『自分で食べる。自分で排泄できる』ことだと考える。この事例が、特養などの施設とグループホームのケアの違いで、このホームの利用者に対する尊厳の守り方はあっぱれである。

パンフレットを見ると、「いつも笑顔が溢れています。いつも冗談が飛び交い、時にはケンカもします。そんな大家族です」とある。害っぽい表現と思えるが、家族はこの通りであり、このグループホームは言葉通り利用者も職員も極く自然な関係で生活をしていると実感した。

調理ができると、「さあ、ご飯が出来たから、盛り付けに集まって！！」の声に2、3人の利用者がオープンキッチンで小皿に盛り付けていく。一人が「ああ、もうやめた」と言って席に戻る。「まだ少し残っているから、もう少し頑張ってくれませんか」「もういい、面倒くさい」「○○さんのご飯を皆待ってるよ」と頼まれると「しゃあないなあ」と言って、またキッチンに戻って盛り付けを続けた。食事は一汁三菜ご飯とご馳走である。「ここのご飯は美味しいよ」「色んなおかずが食べられる」「野菜が一杯食べられる」と口々に好評である。

「私たち、皆役目があるんですよ」と利用者が教えてくれた。食後、ある利用者は台所の塵芥捨ての準備をしている。「これが、私の仕事！」と笑顔でゴミ捨てに行った。

特に改善の余地があると思われる点　　次のような提案をした

日常の介護記録が重要である認識はあるが、現在のケアプランと記録を更に改善して、効率の良いケアマネージメントに結びつけていけるよう職員が皆でよく検討して、利用者や家族のために「ケアの証し」としての記録をしっかり残してもらいたい。

Ⅰ 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有	○	

記述項目　グループホームとしてめざしているものは何か

「自分で出来る事、また、役割を持って楽しく笑顔のある生活をして頂きたい」という方針を職員全員が理解して、毎日利用者と接している。「出来ることは自分で！ 自信と生きがいの持てる暮らし」「自分らしさが継続できる暮らし」を目指している。

理事長宅に、グループホーム（4軒）の利用者を招いて畑で作物を収穫したり、食事を御馳走になって楽しい一時を送っていた新聞記事とその時の写真がリビングルームに貼ってあった。母体の保育園の園児共良く交流できて、子供との馴染みの関係が保たれている。

家族の集いも昨年末と今年の5月に開催し、多くの家族が集まった。家族もよく訪問し、東京の家族も毎月1回は訪問する。

このようにグループホームは、法人理事長や母体の園長の心のこもった支援を受け、家族や地域も支え合って、利用者は幸せな生活をしている。

Ⅱ生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り	○	
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり	○	
4	建物の外回りや空間の活用	○	
5	場所間違い等の防止策	○	

記述項目　入居者が落ち着いて生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か

神楽尾公園の裏手にある農園に囲まれた小高い丘に建っており、利用者は畑作農家の中を散歩する。今朝も元気な女性同士が出掛け、花一輪をみやげに持って帰ってくれた。リビングルームは木肌に触れる事のできる広い空間にゆったりしたスペースをとり、食卓が並んでいる。畳敷きのスペースもある。コタツが置いてある。間もなくコタツに入る季節となり、コタツで寝込んでいる姿が想像できる。

外に出ると、周辺に野菜や花が植えてあり、周辺の畑や森が四季の借景となっている。

居室は、入口に花の名前と絵が貼ってある。「私はさくら」「わたしの部屋はチューリップ」と目印にしていて、自分らしい部屋をつくっている。

Ⅲケアサービス

番号		できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映	○	
7	個別の記録	○	
8	確実な申し送り・情報伝達	○	
9	チームケアのための会議	○	
10	入居者一人ひとりの尊重	○	
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ	○	
12	入居者のペースの尊重	○	
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援	○	
14	一人でできることへの配慮	○	
15	入居者一人ひとりにあわせた調理方法・盛り付けの工夫	○	
16	食事を楽しむことのできる支援	○	

Ⅲ ケアサービス（つづき）

番号	項目	できている	要改善
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援	○	
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮	○	
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援	○	
20	プライドを大切にした整容の支援	○	
21	安眠の支援	○	
22	金銭管理と買い物の支援	○	
23	痴呆の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保	○	
24	身体機能の維持	○	
25	トラブルへの対応	○	
26	口腔内の清潔保持	○	
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応	○	
28	服薬の支援	○	
29	ホームに閉じこもらない生活の支援	○	
30	家族の訪問支援	○	

記述項目　一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か

このグループホームの利用者は、よく喋ってくれる。脳の中に蓄えられている記憶を次から次へと出してくれる。娘時代の良かった話、家族のこと、戦時中や戦後の苦しかった事、築き上げた楽しい家族を失った戦争への憎しみ、水害に遭遇したこと等、私達の話のきっかけに話が展開し、話の輪が広がっていった。認知症の利用者の話はちぐはぐもあるが、これだけ多く話してくれることは、さぞ本人たちも満足だっただろうと利用者の笑顔からも想像できた。これは日頃から、職員がきっかけを見つけ話しをしているのだろうと思う。

「大人の塗り絵を利用者がしている。中には絵を描く得意な人が居て、花の質感をうまく表現しており、職員と季節感のある絵を選んでリビングルームに貼っていた。

洗濯物が乾いた。取り込んでくると、利用者はそれぞれ自分の部屋から籠を持って来て自分の洗濯物を入れて、各自部屋で畳んでしまう。

利用者は、自分で出来る事は自分でするという習慣で生活している実感を得た。

Ⅳ 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映	○	
32	家族の意見や要望を引き出す働きかけ	○	
33	家族への日常の様子に関する情報提供	○	
34	地域との連携と交流促進	○	
35	ホーム機能の地域への還元		○

記述項目　サービスの質の向上に向け、日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か。

保育園が周辺の4つのグループホームの母体であり、その中の1つのグループホームである。それぞれのグループホームは、主体性を持って管理者の持ち味を出している。このグループホームの空気から、自然に生き生きとした生活感、家庭感を感じる。一方で園長と4つのホームの管理者で月1回定期的に会議を開き、しっかりと意思疎通をしている。

家族の協力も大きく、月1回は費用納付に来てもらい、多くの家族が、ホームと意思疎通や協力をしてくれる。ボランティアや近所の人とも交流ができ、運営推進会議を活用していくと、地域密着型のケアサービスの推進に尚一層期待できる。